



副会長 清水勤二博士を

しのんで

名古屋大学 小野 勝次

大そう昔の話になりますが、終戦直後に文部省にいささか変り種のお役人がいて、まだとげとげしかった私共の心をやわらげてくれたことがありました。進駐軍の方にもそんなセクションがありましたので、日本側にも科学渉外連絡のための委員会ができました。文部省もその世話をしたのでしょ、大学学術局長とかいういかめしい肩書のお役人が、われわれの会合で控え目な態度でわざわざ末席の方に坐られたことがあります。下役の人がもっと高い方の席をすすめたところ、「役人は本来サービスをするものだ」とかえってたしなめられたものです。これが、お役人清水局長でした。

名古屋工業大学学長になられてからも、また退官せられて、いろいろ顕職につかれるようになってからも、私はよく冗談に清水局長と呼んだものでした。知らない人は、大先輩をからかっていると思ったかもしれませんが、清水さんの清水さんらしい姿を、この言葉の中になつかしんでいたのです。この心は御本人にはよく通じていたと思います。

長いおつき合いでしたが、社会に対するサービスの精神は、博士の生涯を貫くものでありました。博士の熱心に提唱された産学協同もまた、この精神に基づくものであったと私は考えて居ります。OR学会の活動などを通じて、産学協同の実をあげたいものです。清水博士を記念する何かの企てをする機会があれば——また、同じ思いの方々と共に何か記念になるようなことをしたいものと存じますが——産学協同を促進する事業こそ、これにふさわしいと申せましょう。

OR学会の中部支部を作ろうという話がでたのは、もう三年前のことになります。このとき、私に呼び出しをかけたのも、敬愛する清水局長だったに相違ありません。私は数学者でありますからORに無縁とはいいい切れませんが、あまり専門的知識は持ち合わせて居りません。「清水さん、あなたはORのことなど知っているのですか？」と親しさをいいことにおたずねしたところ、「技法のことまではしらないが、重要性は知っていますよ。何とか育てようじゃないですか」といったような御返事であったと思います。ほかならぬ清水さんにこういわれては、私もできるだけの世話をするほかありません。

技法まではしなくても、中部支部長としての活躍は、清水博士ならでのものでした。入会を勧誘する為にあちらこちらに足を運ばれ、若い者の為に頭も下げて下さいました。研究会などにも出て来られて、理論を軽視もせず理論倒れにもならないように、よく舵をとられました。雄大な理想を持って居られた故博士の手前、中部支部の発展などというけちなことをいうつもりはありませんが、博士の理想をうけついで、それに一步でも近づきたいものと思っています。